

## 文化財から学ぶ豊かな心

奈良県道徳教育振興会議委員

唐招提寺執事、いさがわ幼稚園長 西山 明彦

奈良県には世界遺産に認定された文化遺産をはじめとして、多くの文化財があります。それぞれの文化財は、その時代その地域に根ざした文化が開花した証として、また、人々のよりどころとして保存伝承されてきたものです。今は文化財として管理されているものが大半ですが、それらは、人々の生活の中で必要不可欠なものとして造られた建物や用具ばかりで、当時の人々の生き方や考え方を今も感じることができます。私は、これらの文化財に、子どもたちの心を育てる大きな魅力があるのではないかと考えています。

私の所属している唐招提寺にも、毎年、修学旅行でたくさんの学生が訪れます。多くの学校は、短時間の見学をするだけで、あとは、次の目的地へといそいそと移動していきます。しかし、中には、事前に寺の歴史を学習したレジュメを持ってやってくる学校もあります。特に最近では、修学旅行で寺を訪れる学校が減少する中で、熱心な学校が残り、バスガイドさんに説明を任せっきりの学校が消えたように私は感じています。ここでは岐阜県内の中学校の例を紹介します。

平成8年度から、毎年200名ほどの2年生が、修学旅行で寺を訪れます。見学後、寺の歴史などの話を聞く時間を約1時間ほど設けておられます。そこで、生徒には「僧坊」という鎌倉時代の建物に入ってもらい、寺の雰囲気味わってもらいます。寺側から奈良時代の人々の考え方や、生活習慣、ひいては現代にも通用する世界観をもっていたことまでも説明することがあります。その間、生徒に私語はなく、全員最後まで真剣に話を聞いて、姿勢を崩すことはありません。そして、学校に帰った後に全員が感想文を送ってくれます。その感想文は、ただ外見を見学しただけでは分からない内容のもので、昔の人の考え方を理解し体験していただいたと思えるものばかりです。

次の感想文は、平成16年度にいただいたものです。

「僕は、西山先生のお話を聞いて、今後の生活に生かしていきたいところがいっぱいありました。特に、鑑真和上の遺徳の話と集団社会の中で生きる人の道の話聞いて、生かしていきたいところが見つかりました。

まず、『和上は他人のために何かをしようとし、困った人がいれば助けようとした』という話を聞いたとき、正直、困っている人がいても、たまに見過ごしてしまう悪いところがある僕は、『ここを直さないといけない』と思いました。僕はこの志を忘れないように、やさしい心をもって、がんばっていきたくと思いました。」

生徒が文化財に触れる意義が、よく表れているのではないのでしょうか。文化財を単にモノとしてとらえるだけでなく、それをつくった人やそこで生活した人を思い浮かべ、その思いや考え、生き方に心を巡らせ、自分の生き方へと引き寄せて考えています。本物に出会い、また、本物の体験をしていただいたからだと思います。

豊かな心を育てるために、豊かな体験の大切さが言われています。幸せなことに、奈良に住む子どもたちの周りは、文化財の宝庫です。是非、教員の皆さんをはじめ子どもたちを取り巻く周りの大人たちが、身近な文化財に目を向け、それをつくった人やそこで生活した人たちのことを子どもたちと共に語り合い、学び合っていたきたいと切に願う次第です。